近世初期の文芸

高柳光壽

國史研究會編輯　岩波講座 **日本歴史**

近世初期の文藝

高柳光壽

岩波書店

近世初期の文藝

高柳光壽

一

近世初期の文藝といふことであるが、近世といふ言葉について、私は相當の内容を持たせたいと思つて居るから、まづこの言葉から、話して行きたいと思ふ。

近世といふ言葉は、普通には江戸時代といふことになつて居るやうである。中等學校の教科書などを見てもさやうになつて居るものが多い。そして江戸時代はまた、或は關ヶ原役から、或は家康の任征夷大將軍から、或は大坂夏役豐臣秀頼の滅亡からといふ風に、凡そ三通りになつて居るやうである。從つて近世の初りもまたこの三通りになるのが普通のやうである。併しながらこれらは要するに、政權が豐臣氏から德川氏へ推移したといふ事實を基礎としたものであり、第一の關ヶ原役で區分するのは、實權が德川氏に歸した事實により、第二の任征夷大將軍は名分の上から出で、第三の秀頼滅亡によりて區分するのは、豐臣氏の滅亡といふことゝ、元和偃武といふ事實とから出て居るやうに思はれるのである。そして近世を江戸時代とするといふ區分法は、恐くはそれ以前は戰亂打續いて居たけれども、この時代に入つて、平和の世界を現出し、文運一時に開けて、泰平を謳歌したといふ意味、卽ち戰亂と平和といふやうな意味から、區別して居るのではないかと思はれるのである。さうしてさういふ意味からいふと、秀頼滅亡元和偃

武といふ事實が、近世といふものを區別する上に於いて、最も徹底した區分法のやうにも考へられるのである。從つてかういふ意味から江戸時代を區別するとすれば、江戸時代もまた元和偃武からといふことに區別するのが、至極、尤な方法のやうにも考へられるのである。

併しながらこれらは要するに戰亂と平和とか、或は政權の豐臣氏から德川氏への推移とかいふ、便宜的な考へ方の上に出來たものであつて、社會組織の變化とか文化の變遷とかいふやうな人文發達の上から見たところの區分ではないのである。そして若しも近世といふものが、社會組織の變革とか、文化發展の過程とかいふものゝ上から、中世や、現代と明に區別し得られるとすれば、この近世といふ言葉もまた、社會組織の變革や、文化發展過程の上から區分せられるのが、一番よい方法ではないかと私は思ふのである。この意味からいつて、私は近世といふ言葉は、大體に於いて信長・秀吉の活動時代、卽ち安土桃山時代から、明治維新王政復古までを、その內容とすることが、尤も適當ではないかと思つて居るのである。

抑〻大化の改新以後のわが國の政治は、諸國に國司郡司があつて、司法警察軍事行政收稅等一切の權利を委任せられて、地方の統治に與つて居たのであるが、平安時代の末に至つては、國土の大半は不輸の莊園となり、國司の管轄するところは、全國の百分の一に過ぎずといはれる程の狀態であつた。かくの如き狀態そのまゝに於いて、賴朝の新政府がその政治を圓滑に運轉するといふことは、到底不可能といはなければならない。そこでこの新政府すなはち幕府が、その存立の基礎を確立せんがためには、幕府自らの所領を確實にするは勿論、その軍隊を維持するためには、租稅を全國から徵收しなくてはならない。然も幕府の領知には限りがあり、その他の大半は不輸の莊園であつた。こ

こに於いて幕府は、諸國に守護を置きて軍事警察のことに從はしめ、また國衙領たると莊園たるとを問はず、これに課税せんとして地頭を補して土地を管理し租税の收納を掌らしめた。これより國司領家は、これがためにその權力を奪はれ、政權は朝廷を離れて、自ら武家の手に歸するに至つたのである。

然るにこの守護地頭も、時代の經過に從つて、漸く設置當初の性質から離れ、莊園の制度もこれに伴つて自ら破壞せられ、わが國の社會組織政治組織は大なる變動を見るに至つたのである。元來莊園は私有不輸の地であつて、國司の綺ひなく、その領有權は本家といひ或は領家と稱するものゝ手にあつたが、この本家や領家は多く京都在住の權門勢家であつたが爲めに、莊園には別に下司とか公文とかいふ庄官があつて、その下地を進止して居たのであるが、守護地頭設置以後は、莊園は更に複雜なる狀態に赴き、領家職、地頭職その他の諸職、卽ち各種の得分がその上に設定せられ、領家、地頭以下各〻莊園よりの得分を分割收納して居たのである。然るに地頭は武威に募つて亂暴を働き、文永弘安の役後、請所の制度を奬勵してより、下地の管理は殆ど地頭の手に移り、室町時代に入つては、この形勢は戰亂に乘じて愈〻甚しく、諸職を集めて地頭の手に掌握せしむるに至つたのである。併しながら、地頭もまたその勢力守護よりも弱少なりしため、その多くはまた守護の兼併するところとなり、守護は幕府の地頭御家人をば自己の被管給人の如く召使ひ、軍事警察の權は固より、租税徵集の權までもその手に收め、一地方をば完全に領有することゝなり。莊園の制度はこゝに全く破壞せらるゝに至つたのである。

この一地方の完全なる領有者が卽ち、安土桃山時代以後の大名であつて、信長、秀吉は、かくの如くして自然に發達して來た大名をば、そのまゝこれを採用して制度とし、聽かざるものはこれを討ち、降るものにはその所領を安堵

せしめ、功あるものには地を與へ、然もこれらに對しては、自己の存立を脅かされざる程度に於いて、從來あるがまゝに、兵馬の權と共に、行政收稅の權をも與へたのであつて、こゝに守護地頭の制度は莊園の制度と共に完全に破壞せられ、新に大名制度と共に朱印制度とも知行制度とも呼ばれるものが成立したのである。そして江戶幕府を開いた德川家康もまた、この制度をそのまゝ踏襲したのである。

かくの如き社會組織の變遷、こゝには大要を記したに止るが、この外種々なる點に於いて、この信長、秀吉の活動時代は、政治上の新制度、社會上の新組織の出現を見たのであつて、近世初頭を安土桃山時代から區分するといふことは、政權が德川氏に移動したとか、或は戰亂の時代が平和の時代になつたとかいふやうな事柄で區分するよりも、遙に有意義であると思ふのである。

近世を安土桃山時代から始めるといふ區分法は、更に各種の文化事象についていつてみても、また甚だ合理的であると思はれるのである。例へば兵農分離もこの時代に行はれ、度量衡の統一もこの時代に行はれ、行政區劃稱呼の改正、統一もまたこの時代に行はれたのであり、學問美術等各方面に於いて、舊きものが破壞せられ、新しきものが建設せられたのであつて、安土桃山時代は、實に近世日本の黎明期ともいふべき時代であつたのである。

されば今こゝに近世初期の文藝を述ぶるに當つても、近世初期といふものが、わが國社會變遷の上に如何なる意義を持ち、また文化發展の上に如何なる意味を持つかといふことを、まづ心に留めて解釋せられんことを請ふものである。これ敢て近世の意味について、餘辯を費した所以である。

二

室町時代から江戸時代の中期、所謂國文學復興に至るまでの時代は、わが國文學史上に於ける暗黒時代と普通にいはれて居り、またそのやうに一般に信ぜられて居る如く見受けるのである。併しながら仔細にこれを觀察する時は、必ずしもさやうに簡單に型付けてしまふことは出來ないやうにも思はれるのである。卽ちこの普通に暗黒時代といはれて居る時代こそは、古典研究が漸く分科的に起り來りつゝあつた時代であり、特に近世初期と稱すべき安土桃山時代から江戸時代の初期へ掛けては、學問の科學的な取扱ひ方が起つた時代であつて、元祿以後の所謂文學興隆時代を出現せしむるに至つた甚だ意味深き時代であつたのである。而して更にまた近世文學の特色である平民文學は、實に室町時代よりその曙光を見、近世初期に於いて、繪畫に於ける平民美術とも稱すべき浮世繪と共に、その花を開き初めたのであつて、この點また頗る興味深きものがあるのである。

さて近世初期の文藝であるが、近世の文藝は所謂平民文學である連歌、俳諧、小說、戲曲及び演劇の發達といふ方面に於いて著しき特色を有し、またこの方面に於いて、その價値を多分に持つて居るものであるが、近世初期に於いては、その勃興は見得られるが、遺憾ながら未だ十分の發達を見ず、その藝術的水準はなほ甚だ低いのであつて、この時代には戰亂の餘波を受けた戰記物語や、實際に使用せられた書簡文に於いて纔にその特色を見得るに過ぎないのである。

三

まづ順序として貴族文學から述べることにして、漢文漢詩のことについて一言する。この方面には策彦周良とか南化玄興とか西笑承兌とかいふ人々が有名であるが、要するに、五山叢林の末流であつて、さ程注意すべきものではないやうに思はれるのである。就中玄興の信長のために撰したといふ安土山記にしても、承兌の秀吉のために記したといふ學問所記にしても、われらはその藝術的價値を、當時有名であつた程には受取り得ないのである。それからまた藤原惺窩や林道春などゝいふ近世學問の始祖が輩出して、漢詩を賦し、漢文を作つては居るけれども、これらの人々の領域は實に學問そのものにあつて、決して文藝と稱すべき方面にあつたのでないのである。例へば惺窩の如きは、朱子學を唱道して、儒佛一致の思想に排撃を加へ、以て儒學の獨立を圖り、道春の如きまたよくその主旨を傳へて、儒學の勃興と國體の闡明とに力を用ひ、學問の科學的取扱ひ方に新世界を展開した程であつたが、その作品を藝術的方面から論ずる時は、その價値を從來通りに評價するといふことは困難であると思はれるのであり、また從來の詩文と別個の色彩著しきものとも考へられぬのである。

因に學問の話が出たから、序に一言して置きたいことは、最近惺窩の日記の斷簡が發見されたことである。この日記斷簡は凡三枚半、慶長元年六月二十七日より起つて、同年八月七日で切れて居り、別に鬼界ケ島に於ける作詩、作歌の草稿斷簡が一枚附屬して居る。この日記は此の如く紙數にしても僅少である、時日にしても一ケ月餘のものに過

ぎないけれども、その內容は、實に惺窩の薩摩行に關するもので、わが國朱子學興隆の上に非常に喧しい問題となつて居る事柄と密接なる關係を有するものであつて、その點頗る興味深い材料である。そしてこの日記によれば、惺窩は桂庵の新註を得んとして入薩したものではなく、實に渡明せんと欲し、その手段として、當時海外貿易の巨魁であつた島津氏の援助と便宜とを得んとして、薩摩に赴き、ついで鬼界ヶ島に漂著したものであつて、惺窩の學問の系統、延いては、わが國近世に於ける朱子學の源流を明にする上に於いて、頗る貴重なる材料といはなければならないのである。なほこの事の詳細については、雜誌國史學第三號の拙稿を參照せらるれば幸甚である。

四

ついでは和歌であるが、この頃には幽齋玄旨細川藤孝が、一代の巨匠として、上下の尊敬を一身に集めて居たのであるが、和歌そのものについては殆ど取り立てゝいふべき程の價値はないといつてよからうと思ふ。たゞ併しながらこの頃に於いて古今傳授といふ歌學上のなくてもがなの儀典が完成せられたことを注意して置くに止めたいと思ふ。そしてなほ和歌の墮落はつひに狂歌の勃興を來し、古今夷曲集及び後撰夷曲集等の撰集を見、幽齋を頭梁として、大村由己、僧澤庵宗彭までこれが作者となつて居り、この外英甫永雄の百首、石田未得の吾吟集、少しく降つては半井卜養の卜養狂歌集などの撰があるといふ有樣であつた。

今左に歷史事實に關係ある狂歌兩三を擧げてその一端を示すことにする。

かねのめいかんちやうらうの諸行そやむせうとなりて大坂めつほう

茶うす山引わけになるあつかひは京極とのゝ袋ちやときく

共に大坂陣の時のもので、雄長老百首の中から抜いたのである。前者は文英清韓の鐘銘問題が端緒となつて、秀頼の滅亡となつたこと、後者は冬の陣の時、京極忠高の母(淀殿の妹)が、大坂城と家康の本營茶臼山との間を往復して、媾和の斡旋をしたことを詠じたものである。

この外、雄長老百首の中には、

檢地以後物をもくはで田をつくる苗代餓鬼と人や見るらん

田はたには家はつくらじ度々の檢地の衆の宿にかるゝ

などいふ、檢地に對する百姓の苦痛を詠んだものなども見えて居る。因に雄長老は、諱は永雄、字英甫、小溪と號し、若狹の名族武田信重の子で、京都建仁寺の文溪永忠に從つて法を嗣ぎ、天正十四年建仁寺住持となり、文祿三年南禪寺にまた住持となり、慶長七年寂した。

この狂歌は、實に庶民の間にも理解し得られたので、當時一般民衆の間にも非常の流行を見、何か事件があると、落首といつて、これを諷したものが非常に多く、特に戰爭の時などは、敵味方競つてこの落首をやつたらしく、贈答の狂歌ともいふべきものがあり、それが今に少からず殘つて居るのである。そしてそれらは作者の分明を缺くものが多いのであるが、中には秀吉が作つたといふことが分つて居るものさへあるのである。即ち有名な毛利氏の屬城備中高松水攻の時に、秀吉は、

兩川（吉川 小早川）が一つになりて流るればもり（毛利）たかまつは藻屑にぞなる

といふ一首をさへ作つて居るといふ有樣で、狂歌の流行は當時の一特色といふべく、この時代の和歌には、高踏的なもの、本格的なものは殆ど見られないけれども、平易簡明であつて、平民化といつてよろしいか、とにかく著しく大衆化したことが認められるのである。

五

かくてこの和歌の平民化を最もよく代表して居るものは連歌の流行であり、俳諧の勃興である。

連歌は普通には、日本武尊が東夷征伐の御歸途甲斐の酒折宮で、火燒の翁と問答せられた歌を以て、その起源として居る。けれどもこの說に對しては、これは單に所謂片歌の問答であつて、片歌問答ならば、これより前大久米命と伊須氣餘理姬との間に、既にかくの如き問答歌があるといつて反對する學者が、近來出て來た。併しながら、かくの如きは、たま〳〵か〻る問答歌が今に殘つて居るから、どちらが早いとか遲いとか問題になるのであるが、また片歌問答は連歌の胚芽ではあるが、連歌ではないとか、或は眞正の連歌は萬葉集卷八に見えるある尼と家持との唱和からであるとか、いろ〳〵と論ぜられるけれども、要するに連歌はそれが流行するに至つて初めて、意味を持つて來るのであつて、この意味からいへば大體平安時代中頃以後からといつてよろしいのである。

かくて連歌は鎌倉時代に入つて、漸く進步し、百韻、五十韻、三十韻などが行はれ、內容の雅俗によつて、柿本と

いひ栗本といふ區別まで行はれる樣になり、また堂上、地下の間にも自らその風を異にし、更に規式までも定められるといふやうなことになつたが、南北朝に入つて流行著しくつひに菟玖波集二十卷が撰せられるに至つたのみならず、所謂應安新式目の制定を見るといふことになり、更に室町時代中期になつては、卽ち新撰菟玖波集が成り、明應本式目が出來上り、こゝに連歌はその流行の極點に達したのであつて、宗祇が肖柏、宗長と共に詠じた水無瀨三吟百韻は、蓋しその代表的作品であらう。

近世初期に於ける連歌は、室町末期のそれを引續いだものであつて藝術的に言つて前期のそれと特に相違した色彩があるといふ譯ではないけれども、公家、武家、商人等所有階級の間に普く行はれて居り、そしてそれが歴史的な事實と結び付いて居ることに於いて、多少の興味がないではない。例へば永祿十一年九月、信長が義昭を奉じて上洛した時、紹巴はその東福寺の本營に出頭して、末廣一對を上つた。で信長は、

　にほん手に入るけふの喜び

と口吟んだ。そこで紹巴は取りあへず、

　舞ひつるゝ千代よろづ世の扇にて

と附けたが、この後天正十年五月、本能寺の變を前にして、愛宕山で明智光秀が、

　ときは今あめが下しる五月かな

と發句を作つた時、西坊はこれに續いて、

　水上まさる末の松山

と脇句を付け、そして第三句は紹巴が、

花おつる池の流をせきとめて

と賦した。

この光秀等の連歌は、特に著名であるが、天正十三年十月秀吉が少將に任ぜられた時、公家衆を饗應した席上、秀吉が

冬なれどのどけき空のけしき哉

と發句を吟じた時、これに對して紹巴は

さかへん花の春をまつ比

と脇句を付けたので、秀吉は大にこれを喜んで、卽座に百石の知行を紹巴に與へたのであつた。そしてこの連歌はあまり知られて居ないのであるが、實は秀吉が少將に任ぜられたといふことは、普通には天正十年十月といふことになつて居り、秀吉事記や太閤記にさうして居るばかりではなく、綸旨や口宣案までも十年の日付のものが殘つてゐるので、何人も疑を挿むものが從來なかつたのであるが、吉田兼見の日記天正十三年十月四日の條に、この連歌を載せて、秀吉の任少將の時のことゝ記してあるのみならず、山科言經の日記にも同年同月同日の條に秀吉の少將任官のことが見えて居るのであつて、この連歌は、山崎役の戰功によつて、天正十年十月に秀吉が少將に任ぜられたといふ、可なり重大なる歷史上の記載を訂正し得べき重要なる材料となつて居るのである。

右は歷史上最も有名であり、また最も重要であるもの一二を擧げたに止るのであるが、これに關係して居る里村紹

巴こそは、實に近世初期に於ける連歌界の頭目であつて、一世の譽望を負ひ、中興の祖と稱せられる巨擘である。紹巴は本姓松村氏、奈良興福寺一乘院の被官松井昌祐の男で、明王院に喝食となつたが、若くして連歌に志し、後里村昌休に學んで一家を成し、里村を冒した。早く三好長慶と兩吟をしたことがあり、信長、秀吉の二代に侍して、その信任を得、關白秀次にも親近したが、文祿四年秀次の事があつた時、その事に座して大津に放たれ、三井寺に蟄居した。門人松永貞德がこれを訪ねた時、

志賀の浦やよせきて氷るさゞ浪も春にはやがてたちぞかへらむ

と詠じた。これは和歌ではあるが、和歌としてもこの一首は、この時代に於ける秀逸である。かくて翌年春赦されて京都に歸つたが、この後の生活は頗る落莫たるものがあり、慶長七年七十九歳を以て歿した。

紹巴の作は今日に殘つて居るものだけでも、その數甚多く、殆ど枚擧に遑なき有樣である。でこゝには今、彼の作中の傑作と稱せられる發句を、一二紹介して置きたいと思ふ。

根さへかれて春に若葉の菊もなし　　紹　巴

あだなる露に胡蝶ぬる庭　　昌　叱

これは紹巴の師にして、また昌叱の父なる昌休の七回忌に當り、追善の百韻を興行した時の作である。そしてこの發句は、伊勢物語の「うゑしうゑは秋なきときや咲かざらむ花こそ散らぬ根こそ枯れめや」の歌意を轉用したもので、一世の逸妙といはれたものである。

をのつから塵なき苔のしげり哉　　紹　巴

夏山ちかみ雨はるゝ庭　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　乘珍

郭公ゆふべの月に聲まちて　　　　　　　　　　　　　　　　　　覺祐

この連歌は、福井久藏氏は慶長七年歿前の作として居られるけれども、多聞院日記によれば、天正二十年六十九歳の時の作で、彼が故郷奈良に赴き、故舊に永別の意を以て、詞友乘珍の家で百韻の興行をした時のもの、英俊は、「第三一段々々殊勝々々、發句ハ三體詩於林亭之題ニテ、靑苔日厚自無塵ト云心ニテ、乘珍山居ノ故如此云々」ト批評を加へて居る。

因に連歌は、これより早く山崎宗鑑、荒木田守武等出でゝ、一派を立て、つひに俳諧興隆の基を開いたのであるが、紹巴には宗鑑や守武等程淸新の氣は乏しいけれども、純正連歌としての重みもあり、品位もあることを注意して置きたいと思ふ。而してこの後に至つては、純正連歌には、紹巴の門弟であつて、その養子となつた昌叱があり、また紹巴の實子玄仍があり、南北兩里村家を立てゝ共に江戶幕府に仕へ、また當時連歌界の中心勢力として、相當の活動をしたけれども、文學史上さしたる功績があつたといふ譯ではない。

なほ紹巴の門弟心前は相當の英才であつたらしいが、紹巴よりも早く、天正十七年に歿した。心前の辭世の和歌があるから、それを紹介して置く。

数ふればあまたの人におくれこしわが身の消をなにおもはまし

因にこの辭世については、紹巴の和歌と發句とがあるから、ついでにこれも掲げて置く。

なき跡に數へられんと思ふ身を世に殘しつゝ消ぬるがうき

うき人はさかさまにゆく年もなし

この後に至つては連歌は漸く衰へ、これに代つて俳諧の流行を見、紹巴の門弟松永貞徳出でゝこの方の宗となり、つひに元祿期に於ける正風體の勃興を見るに至つたのであつて、近世文藝の最も特色ある俳諧は、この近世初期に於いては、未だ純正文學として至高の水準に到達することは出來なかつたけれども、連歌の發句は、俳諧の發句同樣、この初期に於いても、最も貴ばれたものであつて、正風體興隆の前期をなすものとして、少なからざる興味を覺えるのである。

六

狂歌と連歌とについて述べたから、これらと關係の深いこの頃の紀行について少しく述べてみよう。

近世初期に於ける紀行としては、何といつても幽齋の九州御動座記、東國陣道記、紹巴の富士見記、林道春の丙辰紀行等がその代表的作物である。

九州御動座記は秀吉の九州征伐に從つた幽齋の手記であつて、天正十五年三月朔日大坂出發より始まり、同年七月十日岡山に凱旋せるまでのものであるが、これは普通の紀行と全く類を異にし、軍事及び政治に關する事務的記事であつて、秀吉行軍の日程宿泊地里數を簡單に明記し、四月に入りてより所々に於ける攻城野戰等の軍事行動を、これまた簡明に記述し、七月十日の條の終りに、日向表に向ひたる秀吉の弟秀長の行動に關する大要を述べ、ついで秀吉

及び秀長部下の交名、人數を記し、更に九州諸大名の獻上品の目錄、九州國分けの次第、戰後の處分にまで及んだものであつて、從來の紀行とは全くその行方を異にしたもので、或は紀行といふ概念の中には入りかねるものであるかも知れない。さればこれを文藝上の作品として取扱ふことには、反對する人々が甚だ多いであらうと思ふのであるけれども、併しながら、それが事務的な記述であつても、その方法が、リファインされて居るといふことになれば、藝術としての見地からこれを見ることも全然不可能ではあるまい。本書はこの意味に於いて、他にあまり類例を見ない作物であつて、その簡明なる記述は、事件の大要を把握せしむる上に於いて、效果甚だ多く、作者の明晰なる頭腦に對して、尊敬を拂はしむるに十分なものがあり、戰陣に於ける文學の一樣式として、この時代にかくの如き作品の生れ出でたことは、頗る意味深き事實と思はれるのである。

東國陣道の記は同じ作者の筆であるけれども、前の九州御動座記とは、全くその類を異にし、從來の形式、就中室町中期以來の和歌入りの紀行の型を踏襲したものであり、たゞ和歌を狂歌に入れ替へたといふに過ぎないものである。さればその特色は文中の狂歌乃至發句にあるのであつて、これに伴ふ諧謔、卽ち作者の事物に對する餘裕といふ點に多少の興趣を覺えるに過ぎない。卽ちこの紀行は秀吉の天正十八年の小田原征伐從軍記ではあるが、戰場に於ける勇士の奮鬪だとか、敗者の悲哀だとかいふものは、殆ど表はれて居ないのである。從つてこれを戰爭文學として取扱ふことは不可能であり、また藝術的作品としても何等高踏的なところが見られず、戰爭をば平常茶飯事として居る戰國の有識高級武士の生活の一面を窺はしめる點に於いて、やはりこの時代の作品であると思はしめるだけである。

九州御動座記、東國陣道の記のことを述べたから今一つ、從軍記ではないが、是齋といふ人の筑紫紀行を紹介して

置きたいと思ふ。これは石田三成が慶長三年秀吉の命を受けて、筑前に下り、小早川秀秋の舊領を處分した時、これに畫家海北友松と共に隨行した是齋といふ人の作であつて、この人の傳記は管見の致すところ、全く分らぬけれども、内容は五月二十九日京都を出發し七月十五日京都に歸るまでの紀行であつて、奥に「慶三七月十五日是齋（花押）」と記されて居る。所々に發句の挿入されて居るところなどから推すと、是齋は連歌師ででもあつたらうか。

明ぬればをの〳〵いそきたちて博多へもいとゝくつき給ふ、此わたりに名所ともおほかり、しかの嶋先まのあたりによべり、海の中道はる〳〵と一筋浪を分たる白洲也、山までつゝくとよめるもしるくそみえたる、海の中道よりしかの嶋へわたる所こそ、しかすかの後なれ、香椎宮も遠からず、箱崎の社は異國降伏のため、西をまもれると聞傳へしも僞ならず、思ひよりしまゝに、

他國もしたかひにけりかゝる世を待てとや神のちかひあらはす

博多の松原につゝきたる所也、ある時三成（石田）此松原に遊給ふ、いと涼しかりければ、

松原はこぬ秋風のやとり哉

文體といひ、結構といひ、何等取り立てゝいふ程のことはなく、洒落過ぎて居るところなど却つて鼻につくけれども、未だ世に知られて居らぬ紀行であるから、一端を紹介して置く。

さて紹巴の富士見記であるが、これは永祿十年紹巴が心前を伴つて、富士山を見物に行つた時の紀行である。富嶽の麗容に接し、天の橋立をわたり、玉津島に詣でんといふ三つの願望の一つを果した時の紀行だけあつて、文章も洗練されて居るし、内容も豊富であつて、當時に於ける第一流の作品であるが、別に新機軸を出して居るといふ點も見

えず、それに紹巴のことは前にも記したし、連歌を主とした紀行であるから、こゝには省略に從つて置きたいと思ふ。

次には道春の丙辰紀行である。これは元和二丙辰の年、道春が江戸から京都へ上つた時の紀行であるといふことになつて居る。それで丙辰紀行といふ名が出來たのだと思ふけれども、仔細に內容を檢すると、これは紀行ではなく、江戸から京都に至るまでの道中にある名所を紹介し、その名所について詠じた漢詩を、紹介記事の次に一々全部置いたものであつて、實はこの漢詩が主體であり、――この事は和歌や連歌を挿入してある從來の紀行文も、實はその和歌や連歌が主體であることは、この丙辰紀行と同樣であるが、――紹介記事は詞書に過ぎないのである。即ちこの書は、鎌倉とか、大磯とか、箱根とか、走湯山とか、三島とかいふ風に、名所の題名を記し、次に紹介文があり、最後に漢詩があるのであつて、その紀行なりや否については、全く疑を挾むに十分であり、たゞ全體の結構が、東より西へ道程の順序に、名所が並べてあるので、紀行の如く見ゆるといふに過ぎないものである。されば、奥書に「元和二年十一月日羅浮子」とあるけれども、これは、この奥書の年に編纂せられたものであつて、この時の旅行の記事であるとは考へられないのである。それにこの年六月道春の弟永喜は江戸から京都へ赴いて居るけれども、道春の京都に赴いたことは何等所見がないのであつて、この丙辰紀行を以て紀行にあらずとする私の考へは、恐らくは妥當であらうと思はれるのであり、もしこれが紀行であつたならば、この書は紀行に一新紀元を開いたものといふべきである。

なほ紀行については今一つ紹介したいものがある。それは玄與日記である。これは文祿五年七月近衞信輔（信尹）が薩摩の鹿兒島から、勅勘を赦されて歸洛した時に、信輔に隨伴した黒蔺玄與といふ人の筆になるもので、道中のこ

と及び、歸洛の後玄與が畿內の名勝に遊び、貴紳文人等に接して、翌慶長二年三月歸國するまでの日記である。卽ち名は日記であり、實も日記であるが、紀行といふ方が適當で、旅行記としても興味深く、史料としても貴重であるが、この作者玄與については、從來全く分明を缺いて居たのである。然るに最近學友桑田忠親君の硏究が行はれて、それが明瞭となつたのである。それによれば、玄與は阿蘇の大宮司の一族阿蘇惟賢である。彼は九州陣の翌年天正十六年島津氏の下に赴いてこれに賴り、間もなく剃髮して黑齋玄與と稱した人である。因に島津氏の記錄、舊記雜錄の中には澤山の九州に於ける武士達の日記が收められて居るけれども、それらに比較すると、本書は文章其他の點に於いても最も優れたもので、田舍武士の紀行としても最も注意すべき作品である。

七

次に物語について述べたいと思ふ。物語はすなはち話であるが、それが文字で記されて居るもの、卽ち物語書が、普通に物語といはれて居るのである。されば古事記を初めとして、榮花物語、大鏡、水鏡、增鏡以下の歷史事實を記したものや、竹取物語、源氏物語以下の小說等もまたその中に含まれるのであるけれども、元來語り物であるといふことに注意を要するのである。卽ち古事記の如き、その內容は語られて來たものであるけれども、それが文字で記されてしまふと、もはや語り物でなく、讀物となつてしまつたといふことである。この意味に於いて、今日普通に物語といはれるものは實は讀み物であつて、語り物として殘つて居るものは甚だ少いといふことになるのである。そして

この事實は讀書力の普及に從つて、物語は製作その當時に於いて、語り物ではなく、讀物として製作せられるやうになつたのであつて、近世に入つて來れば來る程この傾向は著しく、西鶴の小說にしても、馬琴の小說にしても、これらは何れも、語り物ではなく、讀物であつたこと論なきところである。

併しながら近世初期に於いては、文運の興隆未だ著しからず、假作の小話である所謂小說の類は殆ど語り物であつたらしく、歷史的事實を取扱つた所謂歷史物語にしても、また戰記といはれる種類のものにしても、多くは語り物であつたらしいのであつて、このことは大に注意すべき事柄であると思ふ。

八

そこでまづ小說の類から話をして行きたいと思ふ。小說といふのは假作の小話であつて、その始めにあつては、決して今日の作品の如く大規模なものではなく、また文藝としての水準の高いものではなかつたのである。近世初期に於いてもまた、この原始狀態を脫して居たのではなく、語つて人々に聞かせる小話であるが、それをたゞ文字に綴つて讀ませたといふに過ぎないものである。そしてこの小話は所謂草紙として製作せられたものである。併しながら製作者は既にこの頃には讀み物として製作したらしく、それが談話の材料になつたとしても、一定の語り方の下に語られた語物としての小說製作は、甚だ少かつたのではないかと想像せられるのである。換言すれば淨瑠璃であるとか、說敎であるとかいふものは甚だ少かつたのである。

さもあれ語り物が、一定の曲節によつて語られるといふことは、自由談話の形式の下に語られるより後であるに相違ない。であるから、この頃の小説が一定の語り方によつて語られて居なかつたとしても、それが讀物として製作せられたにしても、自由談話の形式によつて、語られて居たことは事實であつたと見てよろしいのである。それはこの小說本たる草紙を一般にお伽草紙といふことからしても十分に想像し得られることである。

お伽草紙といふことは、今日の概念からいへば、婦女幼兒の讀物として述作せられた小話といふことになるけれども、本來はお伽に使用した草紙、乃至お伽の用に供せられる小話を記した草紙といふ意味であらう。この事については、學友桑田忠親君が雜誌國史學に大要左の如く述べて居る。

伽といふのは人が集つて通夜をする意味の語で、戰國時代には伽といふものが必要であつた。それは陣中夜警の場合の伽がさうであつて、將士が夜警をして起きて居るには、咄をし合つて睡眠から免れる外なかつた。故に伽の場合には咄が附きものである。そして部下が主將の夜明しの御相手をする場合には、敬稱してこれを御伽といひ、その際の雜談を御咄といつた。そしてこの御伽をするには專門家が出來て、終には陣中夜警の際に限らず、矢鱈に夜談に花を咲かせる樣になつた。この夜咄の席に於いては、最も體驗の深い者、及び話術に巧みな者が、專門家として一種の職名を與へられた。そしてこれを御伽衆、若しくは御咄衆と稱した。このお咄衆は、毛利氏、武田氏、北條氏、織田氏等にあり、豐臣氏、德川氏もまたこれを傳承した。かゝる次第で、お伽草紙といふのは、お伽衆が主君の御伽に用ひた草紙からその名稱が生じたのではあるまいかといふのである。

大體に於いて首肯し得られる說であると思ふ。併しながら、たゞ私は、このお伽草紙といふことを、お伽衆が主君

の御伽に使用した草紙といふ風に狹義に解釋せず、お伽といふ言葉はかゝる意味の言葉には相違ないが、何時の間にか轉じて、夜咄といふことになり、夜咄などに出る話の材料を書き記した草紙といふ風に廣く解釋してもよいのではないかと思つて居るのである。

それはともかくとして、室町時代以來の小說が夜話などの材材として使用せられたといふことは、正しい解釋である。そして所謂お伽草紙の小說がこの近世初期に於いても、數多く製作せられたであらうことは十分に想像し得られるところである。元來お伽草紙は製作年代の分明なものは少いのであるが、安土桃山時代から江戶時代の初期へ掛けての製作品と思はるれものは、相當に多數に上るのであつて、確實なるもの、特色ある者二三について、少しく述べてみたいと思ふ。

まづ第一に擧ぐべきは監物の草子である。この監物の草子は慶長十二年四月尾張清洲の城主松平忠吉(家康の四男)が卒した時、忠吉から改易に處せられて、浪人して居た小笠原監物といふ男が、奥州松島でその訃を聞き、江戶に歸つて父に別れを告げ、芝增上寺の住持觀智國師源譽存應の下に至つて敎化をうけ、忠吉の葬禮の日、その靈前で、

うき世をばつゝといでつゝ身のはてはもとのみやこへかへるうれしさ

といふ辭世の和歌を詠じて殉死する。するとまたこの監物が愛して居た童に佐々喜内といふものがあり、この者がまた監物のために追腹を切るといふ物語であつて、その內容は事實を可なり忠實に取扱つて居るといふ點に於いて、從來の他の草紙と全く相違して居り、その取扱つて居る事件は殉死といふ、その頃の時代色を最もよく代表して居る事柄であることに注意を要するのであつて、この點頗る興味深き事實といふべく、武家の御伽に用ひる御咄としても頗

る恰好なものである。

第二に擧ぐべきは二人比丘尼である。これは下野の住人須田彌兵衛といふものが、二十五歳で戰死し、その妻が十七歳であつたが、悲歎のあまり、その翌年夫の戰死した戰場に行つて弔ひ、その近くの草堂に宿つたが、その夜の夢に、澤山の骸骨が集つて、同音に煩惱の世界を去つたことを喜ぶ歌を唱つたのを聞いて、大に悟るところあり、附近の里のとある家に到つたところ、その家の女房二十あまりなるが、この妻に向つて、何處より來りしかと問うたので、妻はわが身の上のことを語り、女房もおのが身の上を明かし、幼き時に商人にかどはかされてこの地に來り、人の妻となつたが、夫に死別して、今は一人となつたといひ、これも他生の緣なればとて、妻を引き止めて共住居する中に、女房もまた病死してしまつた。そこで妻は里人を賴んでこれを葬つたが、里人たちはこれを野邊にすてゝ歸つた。妻は五七日の間その菩提を弔はんとて、不斷の念佛を怠らず、七日にかの野邊に行つてみたところ、花の面影跡もなく、五體腫れたゞれて、恐しげに變つて居り、二七日に行つてみると、臭氣堪へ難く、肉も切れ腸も破れて、犬が爭つてこれを食つて居り、三七日に行つてみると、蛆がわき、青蠅が集つて居り、四七日に行つてみると、骨に殘る肉も乾き、たゞ亂れ髮があたりの草の根にまつはつて居り、五七日に言つてみると、白き骨がつがひを離れて、散り〳〵になつて居た。そこで妻はいたく感動し、つひに山寺に入つて尼となり、諸國修行に出たが、ある山中で、貴き老尼をたづねて師とたのみ、道心堅固に有緣無緣を濟度して、往生の素懷を遂げたといふ物語である。

この物語の注意すべき點は、作者が三河足助の鈴木重次といふ立派な武士の子であつて、家康の大坂攻めに從軍し、ついで秀忠に仕へ、元和九年致仕して遁世し、明曆元年七十七歲で歿した人であるといふことである。戰場に馳驅し

た武士が、まのあたり生死の問題に觸れて、現在を夢現と觀じ、不斷の精進によつて、信身を得んと欲する思想が、全編を通じて、力強く表現されて居ることは、やはりこの時代の作物であるといふことを思はしめるに十分である。

なほお伽草紙については、紀伊和歌山の城主德川賴宣の家老三浦爲春のあだ物語等も紹介したいと思ふが、皆省略に從つて置きたいと思ふ。但しこの頃の小說は佛敎の無常觀、因果應報の思想の現はされて居るものが多く、筋は荒唐無稽といふべきものが少くない。なほこの因果應報の思想については、後段に至つて再び述べたいと思ふ。

九

小說について述べたから、次には事實を取扱つた物語、卽ち歷史物語について述べてみたいと思ふ。歷史物語といふと、普通には榮華物語以下水鏡、大鏡、今鏡、增鏡などいつた種類のものだけの樣に解釋して居る向もあるけれども、私はもつと廣義に解釋して、愚管抄、梅松論は固より、平家物語、源平盛衰記以下太平記、應仁合戰記等の軍記物までもこの中に入れたいと思ふのである。かういふ解釋に從ふと、近世初期に於ける歷史物語はその數甚だ多いのであるが、その代表的なものは、太田牛一の信長記、大村由己の秀吉事記、竹中重門の豐鑑、小瀨甫庵の太閤記、作者不明の川角太閤記等であらう。

まづ秀吉事記について述べたいと思ふ。秀吉事記は大村由己が秀吉の事蹟を記述したもので、漢文體で記されては居るが、曾我物語の眞字本同樣和文の語脈を基礎としたもので、それを漢文體に記してあるのである。現在殘つて居

る分は、

播州御征伐之事　奥書　天正八年正月晦日
惟任退治　天正十年壬午十月十五日
柴田退治　天正十一年十一月吉辰
紀州御發向之事
秀吉任官記　天正十三年八月吉日
四國御發向並北國御動座事　天正十三年十月吉日

以上六項目である。この中播州御征伐記及び柴田退治記の二篇は單獨で群書類從にも收められて居る。また東大史料編纂所本秀吉事記は水戸德川家本の寫であつて、この本にはこの六項目の次に豐太閤御詠草といふ一項が加つて居るが、由己の筆で無いことは、いろ／＼な點から見て確實である。

大村由己は播磨の人梅菴と號し、秀吉の祐筆として、文才學識共に備つた人で、當時外典第一と稱せられた。藤原惺窩とも交友があり、惺窩は慶長元年閏七月その薩摩行に際し、大坂天滿の由己の舊居にその遺族を訪ひ、由己の靈前に詣でゞ居る程であつて、秀吉の命を受けて謠曲新作十番を作つて居り、群書類從所收の梅菴古筆傳は、由己の所藏についての記録である。また江村專齋の老人雜話に見える、秀吉の歌の代作をしたといふ友古といふのも、この由己である。而して由己はまた山科言經とも親交があつたらしく、言經卿記には諸所に由己に關する記事が散見し、その著天正記といふ名がまた諸所に見えて居るのである。

言經卿記に見える天正記は、今度行幸記、金銀之記、大政所御所勞之一冊、御產之卷、西國征伐之卷、若公御誕生之卷等であつて、金銀之記といふのは金賦の一件を記したものであり、御產之卷といふのは若公御誕生之卷とあるのと同じものであらう。そしてこれ等は何れも、秀吉事記の續篇を成すものであるけれども、今に殘つて居ない。

因に流布本に太田牛一作と傳ふる天正記九卷といふものがある。併しながらこの流布本天正記は牛一の作のみではなく、この由己の秀吉事記を和文躰に書き改めたものが交錯して居り、しかも由己の漢文體は難解であつたらしく、所々に讀み誤りがあり、全く後の編纂物であることが知られるのである。これらの事の詳細に就いては、學友谷森淳子君の記事が史雜雜誌に見えて居る。

さてこの秀吉事記であるが、顯如上人貝塚御座所日記や、言經卿記、兼見卿記等の記事によれば、これは語り物として語られたことゝ思はれるのであつて、——否、語り物ではなく讀み物として讀まれた——といふのは、謠曲や幸若は謠ひ物であり、平家や淨璃瑠は語り物であるが、曾我物語などは讀み物——讀むといふ語り方の臺本であつたのではないかと思ふ。その曾我物語などゝ同じ讀み物、讀むといふ語り方によつて、この秀吉事記は語られた物であつて、これが後に、軍記讀みといひ、御記錄讀み——三河後風土記など幕府の記錄を、讀むといふ語り方で語つたこと——となつたのであつて、現今の講釋といひ、講談といふのは、この流れを酌むものであらうと私は思つて居るのである。

なほこの頃から江戶時代を通じて盛に書かれた各種の軍記物は、單なる讀本もあつたらうけれども、この讀むといふ語り方で語るための臺本として製作されたものが、甚だ多かつたと想像されるのである。

かくの如くして、この秀吉事記は講談の臺本であつたがために、その文章も耳に聽かす樣に作られて居るのであつて、文字の使ひ方は、多少大袈裟であり、感傷的であり、衒學的であり、感動を强ひるといふ傾きがないではないけれども時々支那の故事を交へるところなど、難しい言葉を用ひて居るところなど、確に作者の博學を思はしむものがあり、相當洗練を經た一種の文體であつて、送り假名返り點がなければ、讀むだけでも一寸難しいといふものである。而して內容は秀吉の注文に依つたと思はれる樣なところがあり、それに筆記も時日をあまり經て居ず、材料の出所もよろしいので、歷史硏究の材料としては、相當珍重すべきものである。

勝家不及力、入天守、呼雙年來所賴股肱臣八十餘人、勝家運命明日相究、今夜及曙成酒宴遊興、可惜餘波、勝家取盃、一族一家次第々々酌流、亂合入違、中飲思指、珍肴珍菓、如山前置、後者始上臈姬公、至局々之女房達老婆尼公、不憚上中下、若妓女取酌、一曲之歌、五段之舞、繰返々々、既醉、表暫雖成樂之聲、裡終悲之意不休、漁陽鼙鼓動地來、驚破霓裳羽衣曲、四面楚歌聲、見之聞之、貴妃千般恨、虞子數行淚、何異之、夜及深更之間、止酒諸士退散、勝家夫婦入深閨、夜半私語、歲比相馴、無思所、唯願下双紕䌷枕、筭萬春之盟、重翡翠衾、加千秋喜、成風前灯日影霜、不待明日晩、而可消果也、

これは、柴田退治の一節、勝家が賤嶽で敗れ、越前北庄城に秀吉のために圍まれ、運命休するを以て、自殺を覺悟するところの條である。漁陽鼙鼓といひ四面楚歌の聲といふあたり、事實をば玄宗と、項羽の故事になどらへたものであり、貴妃といひ、虞子といふ言葉さへもはつきりと使つて居るのである。けれどもこれらは要するに當時の知識階級を目當てとしたものであつて、果して一般民衆には理解が出來たかどうか、恐くは由己自身が當時身分のある人々

の前で讀んで居ることから推しても、一般民衆相手の作物ではなかつた様である。それにしても、中飲、思指などいふ言葉の使ひ方は、和臭著しきものがあり、餘波といふ文字などは適當な使用法ではない様に思はれるのである。

秀吉從寅一點相揃諸卒、攻入城中、於乙丸夜中合戰、伏屍者被疵者、如混沙、流血漂櫓、秀吉所惜英雄、今此時不所用乎、天下弓矢、今日所相究也、成諫勇懸、終攻詰甲丸、丸之中、以大石積上磊、其墻數仞也、比晉平公所造九層臺、天守上九重、石柱鐵扉、重々構精兵三百餘人、楯籠禦之、城内無閑地、五歩一樓、十歩一閣、廊下斜連、天守高聳、以多勢欲攀之、以弓鐵砲打之、以長道具貫之、懸其具足、被疵者多、

これは、同じく柴田退治の中の、前の分より少しく後に續いたところであつて、前の感傷的な記事に較ぶれば、遙に具體的な記述であり、戰闘の勇ましさなど、相當齒切れよく、浮び出されて居るのであつて、眞名本曾我物語よりは、遙に漢文脈の色彩が強く、當時に於ける作品としては、尤も努力せられたものであることが分る。

大村由己の秀吉事記について擧ぐべきは太田牛一の作品である。牛一は尾張春日井郡安食村の人、大永七年の生れで、はじめ僧となつて、山田の常觀寺に居たが、後還俗して又助といひ、また和泉牛一とも稱し、信長に仕へて祐筆となり、信長の薨後一時伊賀松任に蟄居したが、慶長元年秀吉に召されて秀吉に仕へたといふことになつて居るけれども、秀吉に仕へたのは、もつと早く、天正十八年には近江淺井郡の代官をして居た様である。慶長十五年まで生存して居たことは確實であつて、彼の自作の自筆本猪熊物語、――この書は慶長十四年の猪猥敎利一件のことを記したもの――其他の奥書に太田和泉牛一、丁亥八十四歳と記して居るので明瞭である。歿年は分明でなく、彼の後裔太田

直教氏の系圖にも、「卒日年號不知其祥(詳)、法名功源院靜巖良榮居士」と記されて居る。

牛一の作物で主要なるものは、何といつても信長記である。信長記は、全十五卷、その卷頭に「永祿十一戊辰已來織田彈正忠信長公御在世且記之」とあるが如く、永祿十一年信長が義昭を奉じて上洛した時から、天正十年本能寺で自殺するまでの記事で、その製作年代は、第一卷の奥書に、

信長公天下十五年被ニ仰付一候、不レ顧ニ愚案一十五帖ニ認置也、予太田和泉生國尾張國住人、信長公ノ臣也、及ニ八旬頽齡ニ已縮、拭ニ澁眼一染ニ禿筆一者也、丁亥牛一(花押)

と記されて居り、第二卷及び第十五卷の終りに、

太田和泉守八十四歲牛一(花押)

とあるによつて、慶長十五年八十四歲の作であることが分明である。そして十五帖は、永祿十一年第一帖より各一年が一帖となつて、天正十年第十五帖に及んで居るのである。內容は祐筆として信長に近侍して居たために、正確なる材料に據つたものゝ如く、殆ど誤りといふものが見當らないのであつて、この點歷史硏究の材料として最も珍重すべきであり、文藝的作品として見ても、文を行ること平明簡潔であり、軍記物として上乘の作品である。

虎後前山御取出御普請無レ程出來訖、御巧を以而、當山之景氣有レ興仕立、生便敷(キビシキ)御要害、不レ及ニ見聞一之由候而、各耳目を被レ驚候、御座敷より北を御覽ぜられ候へば、淺井朝倉高山大づくへ取上入城し、及ニ難堪一之體、西者海上漫々として、向者比叡山八王寺(子)、昔者尊き靈地たりといへども、山門之衆徒等企ニ逆心一、自業得果之道理を以て、山上山下爲ニ灰燼一、是御憤を散ぜられたる所也、又南は志賀唐崎石山寺、彼本尊と申者、大國震旦迄も無レ隱靈驗

殊勝之觀世音、往昔紫式部も所願を叶へ、古今翫所の源氏之卷を注し、爲レ被レ置所也、東は高山伊吹山、麓は、あれて殘りし不破之關、何れも眼前及所之景氣、又丈夫成御普請、難二申盡一次第也、虎後前山より横山迄、間三里也、程遠く候間、其繫（ツナギ）として、八相山宮部兩所に御要害被二仰付一、宮部には宮部善祥坊被二入置一、八相山には御番手之人數被二仰付一、虎後前山より路次一段惡所候、武者之出入之爲、道之廣さ三間、間中に高々と築かせ、其緣（ヘリ）、敵方に高さ一丈に五十町之間築地をつかせ、水をせき入、往還輙（タヤスキ）樣に被二仰付一事も、生便敷御要害申も愚に候、

これは第五卷、元龜三年の一部で、信長が淺井長政の近江小谷城に對して、同國虎御前山に砦を築くところの記事である。この砦の地勢上の重要さと、景觀の美とを說くあたり、歷史上の事實にまで及ぶあたり、然もそれが煩はしき程度でなく、必要を限度として居るもので、文章もよく出來て居り、數字にも重要點を置く必要があるので、數字を文章の邪魔にならぬ程度に取り入れて居るところなど、軍記物として上乘のものである。古來の軍記ものであつて、この書の如く、數字を多く取り入れたものはなく、またこの書の如く、それが正確であるものは殆どないといつてよろしい。而して記事は誇張に陷らず、華美に流れず、急所々々に十分なる記述を施し、然も一種の氣魄と氣品とを備へ、信長の功業をたゝへて、讀者に嚴肅な感じを起させるあたり、まことに名篇であるといへる。

こゝに掲げたところは一虎御前山の要害に過ぎないが、それでもその要害の築造に對する信長の意圖と、その努力、その威勢、功績とを大膽に然も細心に記述して居る風が見られるのである。天正四年安土築城の條の如きは、その天主閣について、一重々々に細部に亙つて記載があり、然もそれが、よく要領を得て居り、讀者をして倦むことを知らしめず、信長の權勢を表現するに頗る適當なる方法を取つて居るところなど、少なからず感心させられるのである。

天正四年丙子十一月廿一日、内大臣に被レ進二御官位一、禁中へ黄金貳百枚、其外色々被レ備二上覽一、忝も御衣を御拜領、御面目之次第不レ可二勝計一、御官位任二吉例一、直に石山世尊院に至て御成、山岡美作、山岡玉林兄弟、御祝言之御膳上申され、石山兩日御鷹つかはされ、霜月廿五日安土御下、十二月十日吉良御鷹野として、佐和山御泊、次日岐阜御成、翌日御逗留、十三日尾州清洲御下著、廿二日三州吉良へ御出、三日之御逗留、物かず被二仰付一、廿六日清須迄御歸、十二月晦日濃州へ御成、岐阜にて御越年、珍重々々、

これは天正四年の條の最終の一節であるが、行文簡潔、テンポが頗る早く、省略の手法に申分なく、無味乾燥なる記事も、何等の苦澁なく讀過出來るあたり、まことに敬服の至りであり、全篇を通じてこの風著しく、この一節だけでも事件をぐん〱と運んで行く押しの强さと、整理のよく行はれて居る頭腦の明晳さを窺ふに足るものがある。蓋し一種の名文といつて差支へあるまい。そしてこれもまた秀吉事記の如く、讀み物といふ語り方で語られたものであらうが、恐くはその語り方もこの文章と同樣、颯爽たる信長の風姿を描き出し得て十分であつたであらう。

牛一の著書として信長記につぐものは、現今太田牛一雜記と題する一書であらう。その內容は、

條々天道恐敷次第

一三好實休生害の事
一松永久秀信貴城沒落自殺の事
一齋藤道三逆子の變に遭ふ事
一明智光秀信長を弑する事　高松城水攻の事　山崎合戰

一柴田勝家志津ヶ嶽に敗北　北庄に一門滅亡の事
一神戸信孝柴田に與して相果てし事
一小田原征伐　知行割の事
一日本國內金銀涌出　外國より珍寶名物寄りくる事　慶長元年九月土佐沖に漂流の事
一慶長三年醍醐の花見の事

といふのであつて、別に前に佐々木氏の系圖が收められて居る。けれどもこの系圖は別の物が、まぎれ込んだのであらう。なほこの太田牛一雜記と殆ど內容を同うするものに、最近「大かうさまくんきのうち」と題する一冊が發見せられた。これは牛一の自筆本であつて、題名もまた自筆である。大體雜記と內容を同うするものであるが、天正十九年放鷹の事、秀次關白に任ぜらるゝ事、天正二十年聚樂第行幸、征韓の役、大政所薨去、伏見築城、若公誕生の條などがあり、別に、天皇御盛德、秀次最後の事の條が前に附加されて居る。そしてこの方には柴田勝家滅亡の條と、金銀涌出の條とがない。それからまた同じ內容を取扱つた點について比較しても兩者の間に多少の相違があり、牛一は同じものを屢〻書き直して居たのではないかと思はれるのである。この事については、太田系圖にも、「慶長十四年己酉年迄八十三歲記錄失ニ兵火ニ」と記されて居るのでも窺ふことが出來るのであり、信長記にしても、十五卷全部が慶長十五年中に八十四歲の老人の手で全部出來上つたとは思はれないのであつて、これはこれより前既に完本が製作されて居り、それをこの年に寫したか、または改作したものであらう。そしてこの事はまた信長記以外の他の著作も殆ど全部が慶長十五年八十四歲で記されて居ることによつても、推測し得ることゝ思ふのである。

さてこの雜記の內容であるが、これは思想を盛ること頗る短的なものであつて、內題にも條々恐敷次第と掲げてある如く、歷史事實を說くに因果應報の理法を以てしたものである。卽ち三好實休、松永久秀、齋藤道三以下の滅亡を以て、皆これ因果應報自繩自縛と說いて居るのであつて、例へば、

三好實休四國之主ニテ御座候、細川讃州ヲ聟ニ取宥申、勝瑞ト云所ニテ、三月五日ニ讃州ヲ無下ニ生害候、其後實休和泉國久目田ト云所ニ、一年在國候、根來雜賀紀伊國衆、三月五日ニ取詰、生害候、其時實休辭世之歌也、

草枯ラス霜又今朝ノ日ニ消テムクヰハ終ニ遁レサリケリ

ト侍ヒシ、月日モ不換、三月五日ニ腹ヲキラレ候、天道恐敷之事、

といつた類である。これは實休三好豐前守之康が、永祿五年三月五日久米田寺で自殺したのを以て、天文二十二年三月五日に、その女婿細川持隆を謂れなく殺した天罰だといふのである。但し實休が持隆を殺したのは實は天文二十二年六月十七日の事であるが、さういふ風に自己の惡業によつて、また自己が地獄に落つる由を述べて居るのである。この事實の誤りは、誤聞かそれとも故意による作爲か、その邊は分明でないけれども、とにかく事實の誤記は獨りこの實休のことのみに限らず、他にも可なり多いのであつて、このことは頗る注意すべく、種子生現行の教理、因果應報の理法を說かんが爲めに、歷史事實を假りて來たとまで、いひ得る程度の記述法であつて、これは愚管抄に於ける思想の表現と共に、物語の上に於いて興味深き事實といはなければならない。なほ當時に於けるこの因果應報の思想については、後段に於いて再び述べたいと思ふ。

この外牛一の著書には前に一言した猪熊物語、及び豐國大明神臨時御祭禮記等が今に殘つて居る。併しながらそれ

らについては省略に從つて置きたいと思ふ。因に史籍集覽に收めてある太田和泉守覺書といふのは、猪熊物語と同本である。

次には竹中重門の豐鑑である。これは全四卷、秀吉の略傳記であつて、秀吉の帷幄に參じたといはれてゐる美濃の竹中半兵衛重治の子の著作である。多少擬古的な純和文體で、記事は頗る簡單である。間々事實に相違があるが、史料として相當價値高きものである。內容は長濱の眞砂と題して秀吉の生れてから、後に長濱に入ることより始まり、高麗の亂といふ題下にその薨去までを記して終つて居る。寛永八年の作で文學的價値からいへば、信長記などよりは遙に落ちるもので、時代色が明瞭に出て居ないといふ恨みがある。

小瀬甫庵の太閤記は全二十二卷、同じく秀吉の功業を軍記風に書いたもので、一卷から十七卷までは、秀吉の出生から始まつて、秀次の自殺に至るまでの事績を述べ、十八、十九兩卷は織田酒造亟、山中鹿之助等諸士の逸事傳記を錄し、二十、二十一兩卷は八物語と稱して、君臣の道、治國の要諦を說き、二十二卷は豐臣氏の奉行などのことを記して居る。元和頃の編纂物であつて、恐くはその材料の性質が惡かつたせゐか、事實に誤りが甚だ多く、史料としては高級のものではなく、文藝的作品としても、一般に記事冗漫であり、氣魄に乏しく、到底信長記に伍し得るものではない。なほ新撰豐臣實錄といふ眞名本物語があるが、これはこの甫庵太閤記の改作であらうと思はれる節がある。

なほ著者不明の川角太閤記三卷といふのがある。これは天正十年信長の甲州攻入から始まり、十三年北國征伐までを記したものである。また別に殘闕といふのが三卷あつて、これは九州征伐及びその他諸家の逸事等が記されて居る。文中に當時の俗語を用ひ、まゝ他の物語に見えぬ事實を記し居り、然もそれがよく眞相を捉へて居るところがないで

はないが、それと反對に大きな事實に誤りがあり、一局部のことにしか通じなかつた人の手に成つたものかとも思はれる。問答體で一種の趣がある。味ふべき作品である。

この外江戸時代初期の軍記物としては、北畠氏のことを書いた勢州軍記、北畠物語、浅井氏のことを書いた浅井三代記、北條氏のことを書いた北條五代記、武田氏のことを書いた甲陽軍鑑、毛利氏のことを書いた陰德記（陰德太平記の原本）、長宗我部氏のことを書いた長元記等、その他枚擧に遑なき有樣であるが、それらについては一切省略に從つて置く。

十

歴史物語、軍記物と稍似たものに、此頃自己の功名を記した自敍傳が出て居る。大久保彦左衛門忠敎の三河物語を始として、樺山紹劍自記、玉木吉保自身鏡などがあり、少しく簡單なものでは、眞鍋眞入齋覺書、九鬼四郎兵衛覺書、などといふものがあり、文學的には取扱はれぬものではあるけれども、寛永年中幕府へ書上げて差出した、先祖及び自己の功名を記した寛永系圖傳以下の諸家の書上類は、實に枚擧に遑なき有樣である。例へば大坂陣後に於ける井伊家々中の書上げの如きですら數百通の多きに達して居るのであつて、これを文藝的作品と見ることは勿論出來ないけれども、中にはなか〳〵味深きものがあり、そしてこれが南北朝時代の軍忠狀に相當するものであることを思ふ時、時代の姿をば私は明瞭に認識し得るやうに思ふのである。

さもあれ自敍傳としてはやはり、三河物語が最も重要な位置を占めるものであらう。三河物語は上中下三卷より成つて居る。三河物語といふ名であるが、これもまた甚だ適當した名であつて、德川氏及び大久保氏を中心とした軍記物語であることに相違ないのであつて、德川氏代々の仁政と、己が祖先及び一族の德川氏に對する勳功及び自分自身の行動とを記したものである。されば自敍傳といふ概念からは少しく受取れぬ點がないではないけれども、自己のなし來つたところを、歴史と環境とに結び付けて記して居ると見れば、見られないこともないのであつて、やはり自敍傳といつて差支へない樣に思ふのである。それに作者大久保彥左衞門忠敎は自ら、その著作の動機について、各卷の終末每に、他人に見せる爲めではなく、子孫の爲めに記す由を述べて居り、門外不出と誡めて居るのであつて、彼自らは自敍傳の積りで居たと見るべきである。

彥左衞門忠敎は大久保平右衞門忠員の八男、天正三年十六歲から家康に仕へ、翌四年兄七郎右衞門忠世が遠江犬居に天野宮內右衞門を攻めた時、これに從軍し、爾來同國高天神城攻、信州上田城攻、大坂夏陣等に於いて戰功を樹てた。けれども彼は、家康の關東入國の時、宗家大久保忠隣の所領の內で二千石を領して居たに止り、慶長十九年忠隣の失脚に際して、初めて家康直屬の家臣として、三河に於いて千石を與へられたに過ぎなかつた。これは先祖の勳功に誇り、自らの勞苦を過信する彼に取つては、堪へ難き苦痛であつたに相違ない。彼はこの後元和九年に至り千石を加增せられて、二千石を知行するに至つたけれども、それでも彼の自負からいへば、酬いらるゝところ甚だ少かつたであらう。それにこの書は未だ加增になつて居ない元和八年中の述作である。されば本書が如何なる內容を持つて居るか。上に述べたゞけでも大體の想像はつくことゝ思ふのである。

本書は表面から見れば、德川氏の祖先松平太郎左衞門親氏の事蹟から——否それに至るまでの源氏新田氏の系圖から書き起して居り、次郎三郎長親の頃から漸次詳細に亙り、信忠、親康、廣忠歷代の事蹟、それに關係せる自家祖先の活動に及び、つひに主として家康の功業と自己の勳勞を述べて居るのであるが、これを通讀して痛感することは、彼が德川氏譜代の臣下であり、且つ武功少からざりしと自負して居ることである。そしてこの點に對して酬いられざりしことに對する不平である。そしてまたそれを因果觀によつて諦めようとして居ることである。就中この自負と因果觀とは、力強く讀者の胸に迫つて來るのであつて、同時に時代相をも最もよく現はして居ると思はれるのである。彼は表面剛情我慢で、その弱點を押し隱して居るけれども、その剛情我慢の裏には、隱せども包めぬ、諦め所があつたのである。

抑〻わが國の思想界は、漢字の使用、漢籍の學習によつて、早く儒教の影響を受けたけれども、江戸時代儒學の興隆以前に於いては、何といつても佛教の影響の方が遙に大きかつたやうに思はれるのである。佛陀を尊信して、無量無邊の福德果報を得よといひ、頻りに諸惡莫作衆善奉行を勸め、過去現在未來の三世を立てゝ、輪廻應報を說いた佛教は、その渡來以後漸次國民の歸依を得、國民は因果の說を以て事相を觀、欣求淨土を以て理想とするの風を生じ、本地垂迹の說の盛になつてよりは、神號にも佛、菩薩、權現等の稱號を用ひ、神社に佛舍利を納め、佛寺に神體を安置するといふ有樣で、神佛全く混淆し、この考へ方は長くわが一般國民の思想となつて居たのである。而して佛教はその宗派によつて、その主要なる教旨に多大の徑庭があつても、神佛一致と因果の理法とは、平安時代以來江戸時代の初期に掛けてのわが國民一般の信念であつたといつてよろしいのである。

従つてこの時代の一般思想界もまた大體この範疇を出づることは出來なかつたけれども、室町時代に於いて儒學が五山叢林の間に培養せらるゝに及んで儒佛一致の思想を生じ、この思想は再轉して神儒佛一致の思想となり、專ら知識階級の間にあつて行はれた如くである。卽ち相國寺の僧西笑承兌が作つた、秀吉が葡萄牙領印度臥亞の總督に與へた書狀の中にも、それわが朝は神國なりと說き始めて、神を以て萬物の根源とし、この神竺土にあつてはこれを喚んで佛となし、震旦にあつてはこれを以て儒道となし、日域にあつてはこれを神道といふといひ、更に進んで、神道を知れば佛法を知り、また儒道を知ることになると述べ、凡そ人の世に處するや、仁を以て本とする、仁義にあらずんば、すなはち君君たらず、臣臣たらず、仁義施せば、すなはち君臣父子夫婦の大綱、その道成立すと說き、以て基督教を排擊して曰く、爾の國土の如きは教理を以て專門と號して、而して仁義の道を知らず、この故に神佛を敬せず、君臣を隔てず、たゞ邪法を以て正法を破せんと欲するなりと論及して居るのである。

併しながらこの神儒佛一致の思想は當時の知識階級の間に於ける信念ではあつたらうが、一般國民の間には、なほ神佛の一致の思想の方が隆盛であつたらしく、因果の理法による人世觀が上下を一貫して居たやうに思はれるのであり、一般國民處世上の理念としては、神佛一致の思想よりも、因果の理法こそ、より直接的な、より效果的な、生活上の論理であつたやうに思はれるのである。卽ちこの論理の上に立脚すればこそ、神佛に祈願したのである。而してこの因果の理法をその生活原則に當て嵌めて記されて居るものに、先に述べた太田牛一雜記があり、今またこゝに揭げた三河物語があるのであつて、この點についてこの書物は頗る注意すべきものである。

卽ちこの三河物語に於いて、忠教は一族祖先の勳功甚だ大なりしものありしにかゝはらず、忠隣の時に至つて、本

多正信のために失脚するの止むなきに至つたのである。その後正信死して、正信の子正純も失脚し、忠隣の一家は復活したけれども、この忠隣の配流といふことが、どんなに彼を失望させたであらうか、そしてまた譜代を盾とし武功を戈として堂々濶歩せんとした彼自身が、幕府の冷遇にあつて、如何に苦んだであらうかは、決して想像に難くないのである。彼を剛情我慢にせしめたものは、實にこの點であつたのであつて、然もその剛情我慢の人知れぬ慰安所は實にこの因果觀であつたのである。

さればこの三河物語一篇は剛情我慢の一老爺が、老の繰り言を並べたものともいひ得られないこともないけれども、その剛情我慢は一種の窮極に達した人生觀とも見らるべきものであつて、それがひし／＼と我等に迫つて來るのである。

原見石最後モヨカリケル、尤其儀成、悔敷事ニ非トテ、南得(へ)ムキテ腹ヲ切ケルヲ、ソバ寄申ケルハ、サスガ原見石程の者が、最後ヲシラズヤ、西ニムキテ腹ヲ切レト云ケレバ、原見石が申、汝西ヲシラズヤ、佛者十方佛土中无二亦無三除佛方便說ト說給得バ、西方ニ計極樂は有ト計思フカ、荒胸セバヤ、何レ之極樂ヲキラハンヤトテ、南ニムキテ腹ヲ切ケリ、

これは天正九年武田方の遠州高天神が落城した際、城に籠つて居た孕石主水といふ男が、重圍を衝いて切つて居たけれども、武運拙く捕虜となつた。而して家康は、幼時今川氏に質として駿府に在つた時、主水が家康を侮辱したことがあつたといふので、これに切腹を命じたのであつた。その主水の切腹の有様が忠教の氣に入つたので、かやうに記して居るのであるが、この一節は內容が戰記として興味深いばかりでなく、表現の方法も簡潔であつて、可なり力

強く出て居り、作者の性格までもよく出て居る様に思はれるのである。

然る處ニ、長親者侍供ヲ召寄、面々聞カトヨ、北條新九郎岩津ヱ押寄、天地ヲヒゞカセ、タヽカウト見ヘ、其弓矢ヲ取者ノ習ニハ、敵ハ不勢味方ハ多勢成共、スマジキ陣モ有、何況哉、敵者多勢味方者不勢成供、セ而カナハザル陣モ有、此度之儀者、敵多勢成共、せずシテカナハザル陣成、我娑婆之露命、今日ガ限ゾ、面々者何ト思ふゾ、各々一同ニ申上候、如レ仰、何に敵不勢成ト申供、スマジキ陣ヲ被レ成ント被レ仰候ハゞ、莵角に面々供が晋見申間敷、何敵多勢成と申供、被レ成候ハでかなわざる陣ニヲイテハ、莵角被レ成候ヱト可ニ申上一、況哉此度之御合戰、被レ成候ハでカナハザル陣成、時刻うツサセ給日テハ諧間敷、日比之御情、殊更御普代之御主之御一大事ト申、是非供に、妻子ヲ不レ歸見一、御馬之先に而戮死仕而、シデ(死出)三津(遂)之御供社、矢弓ヲ取而の面目ニテ候ヱト、申上ケレバ、長親御涙ヲ流サセ給日テ、我少身ナレバ、普代久敷者ト云供、カイガハシキアテガイモ、ヱセザルニ、普代之主之樣(用)ニ立、妻子ヲ不レ歸見一、無レ恩主ニ一命ヲクレント諍事ハ、有難サヨ、一万余有所ヱ、雑兵五百之内外ニテ、陣ヲセン事ハ、トうラうガ鉞ヲニギルガゴトシ、更バ今生之暇乞に酒出せト仰有リ而、廣キ物ニ酒ヲ入而出るヲ、御箭に一ツ請サセ給日、面々に盃ヲ指度ハ思ヱ供、時刻之のぶる間、盃ト思ヱトテ、廣キ物ノ酒ヱ、御盃之酒ヲ入サセ給ヱバ、思日〳〵に是ヲイタゞキ、御前ヲ罷立、併ギけり、

これは北條早雲が未だ今川氏に客であつた時、氏親の名代として、その兵を率ゐて西三河に侵入した時、松平長親がこれを防がんとして、諸士を岩津城中に集めて、進退を議つた時のことを記して居るのであつて、この事實なども、剛情我慢な彦左衞門の氣に入つたらしく、その記事は、一字一句皆肺肝より出て居るのであつて、頗る氣魄に富み、

くどいといへばくどいところが多少ないではないけれども、文字を弄ぶもの丶到底及ばざる迫力があるやうに思はれるのであつて、一種の名文といつて差支へあるまい。

一體わが國の文學研究は從來平安朝の文學を中心として居るので、一般の好尙が所謂美文にあり、氣魄とか迫力とかいふ樣なものに對する鑑賞が缺けて居る樣に思はれるのであつて、この三河物語などは、平安文學の持つて居る典雅とか、優麗とかいふものはないけれども、そしてまた江戸文學の持つて居る幽玄とか、輕妙とか云ふ樣なものも、少しも認められ得ないけれども、即ち一口にいへば土臭いけれども、作者の體驗と熱意とは、よくその文章をして一種の究竟に到達せしめて居るのであつて、藝術的に取扱つても、甚だ價値高き作品であると思ふのである。

十一

前に近世初期の文藝として最も特色ある自敍傳について述べたから、ついで、これまた近世初期のものとして、最も特色ある書簡文に就いて少しく述べてみたい。まづ例を擧げる。

先度者預御書、謹而拜見仕候、柴田(勝家)我等間柄、何と哉覽被ニ聞召一、可レ被レ成ニ御肝煎一由、忝奉レ存候、乍レ去右に相定申候一書、幷誓紙、血判之筈相違申候へ者、何たる儀も入間敷存候事、

一信孝樣、三助(信雄)樣、其外家康誓紙、幷宿老共之一札以下、未來を大事に存、我等かたに所持仕候事、

一御兄弟(信孝・信雄)樣雖多御座候、別而前々より被レ懸ニ御目一候條、今以左樣に可レ有ニ御座一と存候へは、我等(秀吉)程被レ懸ニ御目一

候者多出來候故、跡へ罷成無念に存候事、

一信孝様、三助様御兩人、御名代御あらそひ被成候に付而、何を御名代に立置候はんと、宿老共淸須にて令二談合一候處、信忠様御子(秀信)を取立申、爲二宿老共一もりたて可申と相定、御兄弟之儀を伺候へば、尤之由被二仰出一候間、四人之宿老共、かやうにも可レ有二御座一と存、御誓紙をしるべと、從二淸須一岐阜へ御供申、信孝様若君様を預け申候事、

一日數無幾二程一御座候に、安土へ若君様を移參らせらるましき由、信孝様被レ仰候て、於二于今一其儀無二御座一候事、

一御兩人之御兄弟様と、御名代を御あらそひにて御座候に付て、御主にことをかき、迷惑仕候、御次(秀勝)も如レ被レ成二御存知一、十五六に御成候て、武者をも被レ致候間、御主に用申ても、人笑申間敷といへども、我等養子にいたし候間、八幡大菩薩愛宕も御照覽あれ、御主に用させ候事、たれ〱申候共、有レ之間敷候事、

一何様に賢人をさはき、何たる儀も、信孝様御事は不レ及レ申、御一類迄も御進退成候はぬをは、馳走可レ申と存候に、何事に而御座候哉、御兄弟様其外御宿老衆之御惡を請申候儀、迷惑に存候事、

一如二御存知一、上様(信長)御存生之時も、我等は播州但州を被レ下、其上北郡、(被下脱カ)於二于今一無二不甲斐一雖二御座一候、西國之先懸仕候へと、上様被二仰出一候に付て、播州致二在陳(陣)一候處に、三木之別所(宗治)企二謀叛一、筑前(秀吉)迷惑仕候處に、重而荒木攝州(村重)伊丹に在之、謀叛を仕上は、通路を切取雖二申候一、終別所が刎レ首申候に付而、上様重々預二御褒美御感狀一、其上但州金山御茶湯道具以下迄取揃被レ下、御茶湯雖二御政道一、我等は被二免置一、茶湯を可レ仕と被二仰出一候事、今生後世難レ忘存候、たれやの御人かゆるしものにさせらるべきと存出候へば、夜晝泪をうかめ、御一類の御事

迄、あだにも不レ存候事、

一右之御褒美之事は不レ及レ申、安土へ致ニ伺公一、上樣之懸ニ御目一候へば、御座所へ被ニ召上一候て、筑前が額をなでさせられ、侍程之者は、筑前にあやかり度可レ存と被ニ仰出一候に付而、猶々はげみをいたし、去年にて御座候哉、因州之內鳥取之城、雖レ爲ニ名城一取卷申、悉刎レ首、是又因幡一國之事は不レ申レ及、伯耆之國中迄本意仕候事、

（中略、六ヶ條、秀吉が光秀の謀叛により信長の訃に接する事、及び高松城水攻山崎合戰等に於ける自己の戰功を述ぶ）

一信孝樣之致ニ御先懸一、御無念をやめさせられ候事者、我等覺悟にて候と存候、筑前不ニ罷上一候共、終には信孝樣明智め首を刎させらるべき御事、案之內とは可レ被ニ思召一候へ共、筑前はやく毛利をも物之數にせず馳上り、信孝樣天下之ほまれをとらせられ候は、筑前覺悟に而、何樣にも在ニ御馳走一、かはゆからせらるべきと存候へば、其御感は無ニ御座一、人並に被ニ思召一候事、迷惑に存候事、

（中略七ヶ條、秀吉美濃尾張を平定すること、美濃を信孝に、尾張を信雄に、長濱を勝家に、坂本を長秀にそれ〴〵渡すことを述ぶ）

一御佛事被レ仰、御兩人樣（信孝・信雄）へ、從ニ御次一被ニ申上一候由、被レ申候へ共、兎角之御返事もなく、又は御宿老衆御佛事之御沙汰も無レ之に付而、天下之外聞如何と存、如ニ御存知一、小者一僕之者被ニ召上一、國をも被レ下候て、人並を仕候事は、上樣之御芳情須彌山よりもおもく奉存に付而、不レ叶御佛事いたし候、御跡をもつがせられ、六十餘州之御佛事御座候はゞ、筑前は御葬禮過追腹十文字にきり候ても、八幡大菩薩恨無ニ御座一候、此由信孝樣へ御

披露賴入候、恐々謹言、

これは天正十年十月八日付で秀吉から、織田信孝の老臣齋藤玄蕃允、岡本太郎左衛門の二人に宛て丶、信孝への執進を請うた披露狀である。清洲會議以後に於ける信孝と勝家、一益との聯合に對し、自己の立場を闡明にし、併せて、その戰功を誇示するところなど、表はし得て遺憾なきものである。かくの如き長文達意の書狀は、これより前、安國寺惠瓊が毛利氏の老臣等に與へて居るもの丶外、管見の致すところ空前といふべく、然もこれ程の氣魄と熱意のある書狀は從來未だ見ぬところである。就中、「筑前が額をなでさせられ」云々の條下の如き、信長秀吉主從の間柄をいひ表はして絕妙といへる。この後この表現法は屢〻用ひられ、黑田長政の事蹟を書いたものにも、關原の役の時、秀吉が長政の手を取つて、感謝したといふ記事が出來て居る。

而してこの書簡文の風は、秀吉書狀の特長であつて、屢〻用ひられ、翌十一年五月十五日小早川隆景に與へて、柴田勝家の滅亡と、畿內東國の形勢とを報じて、毛利輝元をして、益〻舊盟を修めしめた時の書狀など、また古今の名文といつて差支あるまい。

一城中に石藏を高築、天主を九重に上候之處へ、柴田貳百計にて相拘候、城中狹候之條、惣人數入こみ候へば、互共道具に手負、死人依在之、惣人數之中にて兵を撰出、天主內へうち物計にて切入せ候へば、修理も日比武篇を仕付たる武士にて候條、七度まで切而出候といへども、相禦事不叶、天守之九重目の上へ罷上、惣人數に懸詞、修理が腹の切樣見申て、後學に仕候へと申付而、心もある侍は淚をこぼし、鎧の袖をひたし候に依て、東西ひつそと靜候へば、修理妻子共其外一類刺殺、八十餘不身替者切腹、申下刻に相果候事、

日本海々戰を報じた「この日天氣晴朗」云々の一文は報告書でありながら、戰爭文學史上の傑作といはれて居るが、この一文の如き、また單なる書狀の一節に過ぎないけれども、戰況を報じて、眼前に髣髴たらしむるものがあり、戰爭文學としてもまた上乘のものであらう。因にこの一文を前に掲げて置いた秀吉事記の勝家自刄の文と比較して戴きたいと思ふ。この書狀の文章と、秀吉事記の記事との間には、關係の深いものがあることは、一讀すれば誰人にも氣のつくことであつて、恐くはこの書狀も大村由己の筆に成つたものと想像せられるのであるが、秀吉事記の修飾を經たものよりも、この書狀の簡素の方が、如何に我等の胸を打つかに想倒せられんことを望むのである。結局文章は遊戯ではないのであつて、止むべからざる必要と慾求との下に生れてこそ、光彩を生ずるものといへよう。動ともすると學者の文章が文盲の文章に及ばぬものあるは、實にこの點にあるのであつて、學問と藝術とは自らその世界を別にして居るのである。

なほ秀吉の書狀としては、（天正十八年）五月廿日附で、淺野長政他一人に與へたもの、（同年）八月十二日の同人宛書狀等名文が少くなく、更に前にも一寸述べた安國寺惠瓊の毛利氏の老臣等に與へた數次の書狀、小田原陣中から榊原康政が加藤淸正に與へた書狀等、何れも書簡文として、藝術的に取扱つても、相當價値高きものである。

十二

前に讀み物について述べたから、今度は謠ひ物について一言したいと思ふ。謠ひ物といへば、この期に於いては何

といつても猿樂の謠曲である。

謠曲の製作は室町時代を以て全盛期とする。卽ち現存する謠曲の大部分は、世阿彌及び小次郞、彌次、禪竹等の作といふことが出來る。そしてその文章は、古文學の美辭麗句を假り來つて、それらを一つの小說にまとめ上げたに過ぎず、殊に緣語を亂用して居る點は、輕薄な感じをさへ與へるのであつて、創作力の稀薄な點甚だ不滿に堪へざるものがある。そしてその物語の內容をなす思想は、やはり因果應報と欣求淨土とにあつたのであつて、この點についても、甚だ不滿を感ずるのである。

併しながらこゝに注意を要することは、謠曲は單なる謠ひ物ではなく、舞臺藝術たる猿樂の臺本詞章であるといふことである。されば謠曲の文章は舞臺に於ける演出を豫想して製作せられて居るといふこと、これはそれの作者が猿樂の役者であつたといふことから見て、頗る興味深き事實といはなければならない。されば謠曲の藝術的な鑑賞は、舞臺と共にするにあらざれば殆ど不可能といつてよろしく、半面より論ずれば單なる文學としては、その價値甚だ高からずといはなければならないのを、如何ともすることが出來ないのである。

近世初期に於ける謠曲の作品といへば、所謂新作十番である。そして今日に殘つて居るものは、明智討、柴田、北條、吉野詣、高野參詣の五番に過ぎない。この新作十番は、秀吉治世の間に於ける忠孝、武勇、幽玄、奇瑞等、その傑出の事を以て、十番としたものであつて、かつて何人かゞ作つて置いたものを、秀吉が大村由己に命じて改作せしめ、金春大夫を以て音節を付せしめ、以て後代に傳へんとしたものである。秀吉が演能を好んだことは、秀吉自筆の消息や、江村專齋の老人雜話、さては能之留帳などによつて明であるが、彼自身の履歴を能に仕組ませたところ、彼

ならではと思はしめるものがある。ともあれ明智討を少しく左に紹介する。

いそく行衛はひまの駒〳〵、雲に(井脱カ)かける心かな、是は羽柴筑前守秀吉なり、偖も我君征夷大將軍信長公、西國追罸の事、某仰を蒙り、天正十年の春より、備中表敵軍對陣候處に、明智日向守光秀逆心を構へ、將軍を討奉る由注進候間、いそぎ光秀がかうべをはねうずるにて候、

「いそく〳〵」以下は次第であり、「是は」以下はシテ詞である。文章は事實そのまゝを記してゐるのである。ついでサシにかゝる。

比は水無月初つかた、多勢の敵をしたかへつゝ、既に打立雲水の、流れてはやき年の矢の、いさむ心にまかせ行、跡はる〳〵の備中や、備前表をかへりみて、五更の天もあかしがた、須磨の浦風立まよふ、雲よりおつる布引の、瀧の流れもはるかなる、芦屋のなだも打過て、難波入江のみをはやみ、芥河にも著きにけり、

五七調を繰り返して居るのであるが、そして文句は多少の美しさはあるけれども、これでは悲劇の主人公が道行の體であつて、天下分目の戰爭に於ける勝利者が、大兵を率ゐての行軍とは、如何にも、取り難いのであつて、舞臺を約束して居るとはいふものゝ、前に掲げた信長記や三河物語とは比較にならぬ程の低劣な作物といつてよろしい。尤もこの低い調子は謠曲全部の持つ缺點ではあるが、卽ち五番とも何れもこの類であつて、取りたてゝいふべき程のものはない。なほこの五番の外に、豐國詣といふ一番があるが、それも同樣といへる。

なほ近世初期に於いては謠物としては、幸若の流行も著しかつたけれども、この期の作らしい作を私は知らないのでそれは略する。

十三

次は語り物である。平曲は近世初期に於いても流行を見たけれども、その詞章は遙か前代のものであつて、決してこの期の製作ではない。そしてまた平曲はこの期に於いては既に衰運に向ひつゝあつて、淨瑠璃がこれに代つて、語り物の中心にならんとして居たのである。

淨瑠璃は平曲を基礎とした語り物であつて、淨瑠璃姫物語を語るところからその名を得たのである。それは恰も平曲が平家物語を語ることからその名を得たのと同樣である。そして淨瑠璃の流行は室町の中頃からであつて、近世初期に於いて急速なる發展を見、操りと結び付いて、淨瑠璃姫物語の外に他の多數の作詞を見たのであつた。

淨瑠璃姫物語十二段草紙は、從來小野お通の作といはれて居たけれども、その然らざることは、今日一般の常識であるから、それについては、今は全く省略に從つて置きたいと思ふ。

阿彌陀胸割は、言緒卿記及び時慶卿記の慶長十八年九月二十一日の條に見えて居り、慶長の末には相當行はれて居たこと明であり、その製作年代も恐くは、これよりはあまり溯山は溯らないであらうと想像せられたのである。その梗概は、天竺毘舍利國に、かんし兵衞といふ長者があり、天壽姫といふ七歲の姉と、ていれいといふ五歲の弟の二人の子があつたが、善を作し德を積んで後生を願ふの要なしといふので、佛法を敬はず、惡事ばかりをして居た。依つて釋尊は、この長者を地獄へやつてしまつた。そこで二人の子は袖乞ひとなつて諸方を流浪し、つひに大滿長者の夢

が城へ辿りついた。然るにこの長者には松若といふ一人の男子があつたが、不思議の病にかゝつて癒えぬ。これは松若と同じ相生の女の生膽を取つて、延命酒で用ひれば平癒するといふので、いろ〳〵搜した末、天壽がその相生に當ることを聞いて、長者はこれを天壽に話すと、天壽は父母の菩提のためなれば命は惜しくはない。たゞ七間四面の黄金の堂を建てゝ阿彌陀如來をあがめたまはるならば、求めに應じようといふ。そこで長者はその通にしたところ、天壽はこの堂に入つて、如來を伏拜み、念佛の功德によつて、父母諸共救はれんことを願ひ、やがて出でゝ腹を割き生膽を松若に與へると、松若は難病忽ち平癒する。そして長者が堂に行つてみると、天壽兄弟は熟睡して居て、阿彌陀の胸から血汐が流れて居た。そこで天壽を迎へて松若に配し、弟のていれいは出家して佛に仕へるといふ、卽ち阿彌陀胸割の由來である。この作は、文章の修練は經て居ないが、十二段草子や、また謠曲などの樣に衒學的なところがなく、平易簡明な點頗る愛すべきものがある。元來わが國の文學は、長い間學問と藝術とを混同して居り、學者の作物には、和漢古今の典籍を引用することが常となつて居たのであつて、この點からいつて、この阿彌陀胸割は如何にも平民文學らしい作品といつてよろしいのである。

阿彌陀胸割について一言して置きたいのは牛王の姫である。これは三壺聞書によれば慶長十九年に金澤で語られたことがあり、また南浦文集によれば元和三年薩摩で語られたことが知られる。やはり近世初期の作品であらうと思ふ。內容は十二段草子から思ひ付いたもので、牛若丸のことであるが、勇壯活潑なところや、苛酷なところなどが、やはりこの時代の作らしい氣分を漂せて居る。

この外少し時代が下ると高館なども、語られて居たらしいが、それは幸若にもあり、小袖曾我などいふものも行は

れたらしいが、これは舞の方から來て居るらしい。これらは今省略して置く。

十四

最後に里謠、特にかぶき歌について一言して置きたいと思ふ。

かぶきは普通には出雲の巫女お國が創始したといはれて居る。お國の出現によつて、一時に隆盛に赴いたことは事實であるけれども、お國の創始といふ點についてはどうかと思はれるのである。卽ちお國かぶきはお國によつて特色付けられた。創始といつてもよい程のものであつたらうけれども、かぶき踊そのものは、これより前既に存在して居たといふ方が妥當の樣に思はれるのである。そしてお國については、最近私の研究によれば、出雲大社の巫女ではなく、傀儡子などいふ賣淫と遊藝とを職業とする階級の出身であつて、天正十年には十一歳で、既に奈良の春日若宮の拜殿で、歌舞の興行をして居たのであつた。そしてその踊は當時、かゝ踊りと稱せられて居たのである。その後お國は天正十六年京都で興行して居ることが知られるが、この頃には旣に出雲の巫女であるといふ評判が立つて居り、神歌及び小唄を唱ひ、それに伴つた踊りをして居たのである。そして慶長の八年頃から遽に有名になつて、その踊りと歌とは一世を風靡し、このお國にまねた、かぶき踊りが澤山出て來たのである。いや恐くはお國と同樣のかぶき踊りが、恐くはお國かぶきと同時にも、澤山あつたであらうが、それらもお國かぶきの名聲と共に一時の流行に投じたのであらう。

お國かぶきといふのは、まづ最初に「都のはるの花盛り、かぶき踊に出でうよ」といふワキ次第らしきものがあり、ついで「そも〳〵これは出雲國大社に仕へ申す社人にて候、それがしむすめに國と申す巫子の候を、かぶきおどりと申すことをならはし、天下泰平の御代なれば、都へまかりのぼり候て、おどらせばやと存候」といふ名乘りがあり、次に「故里や出雲の國をあとに見て」と、お國が揚幕から橋掛りへ謠ひながら出て來る。そこで長門の國府に出で、廣島、牛窓、大坂等を經て、京都へ著くまでの道行があり、「いそぐ心の程もなく、都に早く著きにけり」といふので、舞臺の眞中に出る。そしてそれから念佛踊となる。

この念佛踊といふのは、「光明遍照十方世界、念佛衆生攝取不捨、南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛南無阿彌陀」、「果敢なしや、かきにかけては何かせん、心にかけよ彌陀の名號、南無阿彌陀佛南無阿彌陀」などと謠ひ、鉦をたゝきながら、踊るのである。この念佛踊といふのは、お國かぶき中の一種目であるが、この踊はかぶに限つたものではなく、他にも早くからあり、それに多少の改作を加へたものではないかと思ふのである。

この念佛踊をやつて居るところへ、名古屋山三の亡靈が出て來て、お國と山三の亡靈との問答があり、「いざやかぶかん」といふので、これから、所謂かぶき踊りになり、かぶき歌を謠ふのである。かぶき歌の一二の例をあげる。

淀の川瀬の水車、誰をまつやらくる〳〵と、

沖の鷗にものとへば、われは水鳥波にとへ、

何をなげくぞ川柳、水の出はなを歎きそろ〳〵、

などゝいふのがある。この三首は何れも今日に生きて時に謠はれる歌詞であるが、それがこの頃のかぶき歌であつた

ことは、興味深き事實といはなければならない。

併しながら、元來このかぶき歌の樣な小唄は里謠であつて、その作者が分明を缺くのみならず、製作年代すらも判明しないものが多いのである。こゝに掲げたものゝ中にしても、第一首は大永の奥書のある小唄集「閑吟集」の中に、

宇治の川瀬の水車、何とうき世をめぐるやら、

といふのを改作したものゝ樣にも思はれるし、更に閑吟集に見えて居る、

本幡山路に行暮れて、月を伏見の草枕、

の一首は、お國かぶきの草紙には、

木幡山路に行暮れて、二人伏見の草枕、

と見えて居るのである。月が二人になつたまでゝある。これなどは改作といふよりも、傳唱して居る間に何時の間にか月が二人になつたといふべきであらう。元來里謠といふものは、當意卽妙といふことが可なり重要な意義を持つて居るのであつて、――これは里謠に限つたことではないが、――環境によつて、歌詞を變化させて行くところに味ひがあり、生命があるのである。例へば愛慕の情を訴へるにしてからが、それに里謠を使用するとすれば、最もよき效果を得る方法を取つて、歌詞の或る一部分を變化せしむることは、必然の歸趨であらうと思はれるのである。中村福助氏所藏の「かぶきのさうし」に見えるかぶき歌の中にも、

とてもこもらば淸水へ〳〵、花の都を見下して、

といふのと、

とてもこもらば豐國へ〳〵、花の都を見下いて

といふのと二首が收めてある。これは恐くは、淸水の方が前に出來て居たのが、後豐國神社建立のことがあり、豐國祭が盛に行はれ、そして豐國社が花の名所として喧傳されるといふ狀態になつたので、淸水を豐國に取りかへたゞけの歌が謠はれるといふことになつたのであらう。この樣な有樣であつて、里謠は事件や、事物を取換へれば大同小異であつて、歌章そのものに時代的特長を見出すといふことは、可なり困難であり、表現の方法や、包含されて居る思想についても、時間的な變化はそれ程でないといふことが出來る樣に思ふのである。

かくてこのかぶき歌は、舞臺と共に見物も一緒に唱つたのであり、時によつては見物が、唄によつて舞臺をリード して居たのではないかと思はれるのである。そしてその歌詞は長短樣々あつて、その長短によつて曲節もまた相違して居たことは十分想像出來るし、舞踊にも多少の變化があつたことゝ思ふのである。それは尾張德川家所藏のかぶきの草紙によつて明である。このかぶきについては後段に今一度述べたいと思ふ。

さてお國かぶきであるが、舞臺でお國と山三の亡靈とがかぶき歌を謠つて踊つて居るところへ、更にまた茶屋のおかゝといふものや、猿若などが出て來て、狂言風のことをし、相當の痴態を盡したことゝ想像されるのであり、それが終つて、今度は淨琉瑠もどきといふ一段に移るのである。もどきといふことは、正式なるものを滑稽化して再びするといふことであつて、お國かぶきの淨瑠璃もどきの歌詞も殘つて居るけれども、今は略する。そしてこの一段が終ると、お國と山三の亡靈との別離の段になり、お國が別離を惜しみながら、再びかぶき歌を謠ひ且つ踊り、最後に、お國は出雲の神の權現であつて、衆生の惡を拂はんがために、かぶき踊を始めたといふキリで結ぶのである。

次に尾張徳川家の繪卷の釆女かぶきを一寸紹介して置く。これは、寛永頃の作品と思はれるもので、富士の踊、忍び踊、因幡踊、鐘聞き、しての五種目五段の踊から成つて居り、各〻その踊の歌詞がある。こゝで一寸注意して置きたいことは、一體從來は、小原木踊とか、念佛踊とかいふものをかぶき踊の別名と解釋して居たのであるが、それは實はまあかぶき踊の中の一種目に過ぎないのであつて、その事はこの釆女かぶきの繪卷に種別を立てゝ居ることによつて推測出來ることゝ思ふ。

暇乞には來れども、碁盤面で目がしげければ、まづお待ちあれ、柴の編戸も押せば鳴る、あはれ霞がはらほろと、降れがな、そのまにあ、笑止と立つ名、あ笑止と立つ名や、忍び踊りは面白や〳〵、

これは忍び踊りの一節であるが、お國かぶきの歌詞と比較すると、長さも長いし、內容も複雜である。從つてその踊りも、お國かぶきよりは聊か複雜になつて居たことゝ想像されるけれども、繪を見ると、簡單なる振りを、數人が同じ姿體で現はして居るものであつて、このかぶきもまた、踊りは複雜ではなかつた樣である。そしてまた因幡踊りや、鐘聞きになると歌詞は更に複雜に赴き、踊りも複雜であつた如く想像されるけれども、踊の方はそれ程ではなかつたかも知れぬ。それにしても、こゝまで來ると見物と舞臺との關係は、お國かぶきの如く、密接ではなかつたのではないかと想像せられるのである。併しながらお國かぶきの方は歌詞は簡單であるが、山三の亡靈が出て來るあたり、多少の脚色があり、また茶屋のおかゝや、猿若などを出して、物眞似狂言をしたのであつて、歌唱と舞踊だけの、釆女かぶきよりは、この點返つて進歩して居たのであつて、かぶき劇の發達過程から見て注意すべき事柄である。

なほ近世初期に於いて、かぶきと共に非常の流行を見た唄は隆達節である。隆達節といふのは堺の人隆達が創めた

と稱せられる小唄であつて、文祿慶長の頃に甚だ盛んであつた。その歌詞は今に殘つて居るものでも數百の多きに及ぶけれども、今はその例として二三を並べるに止める。

あふ時は、秋の夜もはや、明けやすや、獨りぬる夜の、長の夏の夜、

とても消ゆべき、露の身を、夢のまなりと、夢のまなりと、

月もろともに、立出てゝ、月は山の端にいる、我はつま戸に、

君のこゝろか、かはれかし、つれなきこゝろ、

第一は五七五七七、第二は七五七七、第三は第二の破調七五十七、第四は七五七といつた有樣で、歌詞の構成に相違があり、長短がある。そして大體に於いて、五七五七七調のものには、概して面白いものは少い。それから君が代は千代に八千代にといふ現在國歌となつて居る古今集の和歌さへも、隆達節の歌詞として、その小唄集に收められて居るといふ有樣であつて、隆達節の歌詞は、かぶき踊の歌詞と同樣、その製作年代を明にするといふことは、甚だ困難といつてよろしい。

十五

近世初期は、守護地頭の制度から大名の制度へ、莊園制度から知行制度へと推移した時代であり、わが國の社會は各方面に於いて多大の革新をなしたのであつた。卽ちこの時に當つて、全國に檢地が行はれて、完全なる土地臺帳が

作製せられ、租税は各人の負擔能力に應じて、比較的公平に賦課せらるゝに至り、度量衡は統一に近づき、行政區劃の稱呼は劃一せられんとし、金銀貨幣の鑄造また甚だ盛んであつて、貨幣の流通漸次著しく、わが國の社會はこゝに全く面目を一新し、新しき社會組織、新しき階級固定を實現せしむるに至つたのであつて、近代國家としてのわが國は、この時代に於いて、その生成への準備を始めたともいひ得るのである。

されば文化的現象に於いても、またこれと相關連し、各方面に於いて、古きものがすたれ、新しきものが起り、思想界にあつては、佛教に代つて儒學の興隆を見、美術界に於いては宋元畫に代つて大和繪の復興を見るといふ有樣であり、音樂舞踊の方面にあつては、能樂謠曲に代つて歌舞伎淨瑠璃の興隆を見んとして居たのである。而して文藝の方面に於いてまたこの圏外に立つことは出來なかつたのである。

近世初期の文藝は、一口にいへば、所謂貴族文學より平民文學への推移時代にあつた。貴族文學たる和歌は殆ど見るべきものなく、漸く連歌に於いて餘喘を持つといふ狀態に過ぎなかつたのであり、然もそれらは貴族の手より離れて、全く職業的な知識階級の手中にその主權を握られて居たのである。而してこの連歌さへも、時勢の影響は免れ難く、やがて俳諧へとその歩みを移して行つたのである。而してこの傾向たるや、當時貴族の間に流行して居た謠曲は、謠としては依然としてなほ流行して居たけれども、文藝としては新作の數甚だ減少せるのみならず、その價値著しく低下し、これに代つて、淨瑠璃の勃興となり、これが普く庶民の間に行はれ、未だ高級なる作品を見ることは出來なかつたけれども、近松等の輩出を豫約して居たといふ狀況にあつたのである。殊にこの期に於ける平民藝術たるかぶきの勃興は、近世に於ける演劇の大宗と成つたのであつて、わが國現代の演劇は、遠くその源流をこゝに發して居る

のであつて、頗る注目すべき事實といはなければならないのである。

併しながら近世初期の文藝として、最も特色あるものは、歴史物語と書簡文である。特に當時の戰記物は、直接戰場に馳驅したものゝ手に成つたものが甚だ多く、またさういふものに高き價値を認めらるゝのである。これは生死の堺に人生の眞髓を把握し得た彼等が生活の結晶であつて、文字を翫弄して居る貴族や知識階級の到底到達し得ざる境地に於いて、筆を運んで居るためで、その表現の如き、從來の方法に禍はされる事なく、新天地を開拓して居るのであつて、まことに尊敬に値するものがある。書簡文もまたこれと同樣である。自己の存立を左右する文章が、熱と力とを持ち來ることは當然であつて、男女の情事以外に役立つことを知らぬ書簡文、日常時宜に止つて居る書簡文等とは自らその選を異にする。卽ちその內容は人生の重大事に觸れ、その表現は男性的な力强さを以て、讀者に迫つて來るのであつて、自ら頭の下るのを覺えるのである。

大久保彥左衞門は、若き半生を每日獨樂をまはすが如く、境目（戰線）に働いた身で、子孫を戒めるために自敍傳を記して居り、太田牛一は八十四歲の老眼を拭うて、その主信長の爲めに、その功業を後世に傳へんとして、見聞を綴つたのである。今われらは武人として、これら人々がなし遂げた功業を、そのまゝそれら人々の作品に見るのであつて、近世初期の社會を動した人々の手によつて、近世初期の文藝に光彩を添へ得たことを、頗る愉快に思ふのである。

（昭和九、六、十七）

昭和九年七月三十日印刷
昭和九年八月三日發行

岩波講座 日本歴史
第十一回配本 五

編輯者　國史研究會同人代表　黒板勝美
印刷兼發行者　東京市神田區一ッ橋通　岩波茂雄
印刷所　東京市神田區美土代町　三秀舍

寺島製本


EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO
3 1761 02951 7174